教育長だより　No. 4

２０２１年4月１６日

家庭訪問 どうしますか？

～ 子どもをまるごと捉えるために ～

小中学校ではもうすぐ家庭訪問が始まります。中にはコロナ禍に合わせて「中止」、「個別懇談会」あるいは「希望制」なんてとこもあるようですが。まあ今回はそういう判断をされる学校があっても仕方がないと思いますが、そんな学校もできれば別の時期に実施してほしいと思います。それは、家庭訪問が子どもをまるごと捉える一つのいい機会になるからです。

私が野洲小の校長のとき、家庭訪問から帰ってきた先生が職員室でこんなことを報告してくれました。子どもの家に行って初めてわかったことがあったからです。２つ紹介します。

Ａ 先生「校長先生、ちょっと聞いてくださいよ。うちのクラスの〇〇さんとこへさっき行ってきたんですけど、はじめ、びっくりしました。通された部屋に洗濯物が山のようにあったんです。お母さんはちょうど仕事から戻られたばかりで、恐縮してはりましたけど・・。子どもたちがみんな学校に上がったんで、３人の子育てのためにお母さんはたいがい遅くまで仕事をされてるようです。その洗濯物を取り入れるのが一番下の〇〇ちゃんの日課だとわかりました。子どもたちにそれぞれ家事を分担させてはって、ホントにお母さんががんばっておられるのがわかってよかったです。」

Ｂ先生「私、今日は１件だけ困ったお家がありました。『どうぞ。』って上がらせてもらったのはよかったんですけど、さあ座ろうと思ったら、あたり一面うっすらと棉ぼこりがあったんです。お母さんが座布団を出してくれたので座れましたけど・・・。お母さん自身もしんどいようでした。」

ほとんどの子どもたちは毎日登校してきます。同じような荷物を持って。ましてや中学校は制服ですから、服装まで一緒です。でも、それぞれの家庭はさまざまです。中には「重い生活」を背負って来る子もいます。また、今の日本では貧困や虐待などは「見ようとしなければ、見えない」状況です。「踏み込んでいかないと見えない」子どもたちの生活があります。そんな生活の一コマでも見ることができたら、家庭訪問に行く価値があります。私たちの先輩は、そんなところを見つめるために家庭訪問を繰り返されていました。かつては『靴べらしの同和教育』とも言われていました。表向きは同じように見える子どもたちですが、そんな中で重い生活をかかえざるを得ない子が何人かいます。そこが担任の先生に見えたとき、「ああ、この子は学校に来てくれるだけでもがんばってるんやなあ。」と、いとおしくなります。そんな子を学級の真ん中に据えて仲間づくりをしていました。この姿勢は、今も変わりません。人権教育の原点だと思います。

話を元に戻します。今の先生にとっては、一般的には「親（保護者）さんと何を話そうか。」と考えておられるのではないでしょうか。 でも、たかが１０分や１５分では、突っ込んで話すことは難しいと思います。また、親の願いを聞くことも同様に時間切れになりそうです。どうしましょう？少しでも「実のある」家庭訪問にするには？　ヒントは「ケース会議」です。校園では、課題の重い子をめぐって論議する「ケース検討会議」が時々行われます。そのときに使う『ベースシート』（一人の子を「まるごと」見ていくための資料）があります。家庭訪問では、ベースシートに書けるような中身（家庭環境や生育暦、親の願いなど）を少しでも話しましょう。でも、いきなりは難しいですね。信頼関係がないと。そこで、まずは仕事について聞いたらどうですか？ 「なんで仕事やねん。」

という人もいると思いますので、以下に書きます。
　私はもと中学の教師ですので、中学校の例を紹介します。喫煙（数人がタバコを吸うという問題行動）がわかったら、学校ではすぐに本人たちを指導します。その後、保護者さんに学校に来てもらいます。このとき、何をおいても来てくださったら問題はありませんが、わが子の生指で学校に行くのは、保護者にとっても「気が重いこと」です。「ちょっと仕事が・・」という理由にもなりかねません。ですから、何時までどこでどんな仕事をされているのかぐらいは、知っておく必要があります。

　さらに、それ以上に人権・同和教育の観点から言うと、「親を人生の先輩として見ること」の大切さです。日常的に「子どもに一番近い先輩は親」です。いろんな失敗や成功体験をしている親さんは、子どもの「生きかた」の一番の鏡（モデル）となります。つまり、「親の生きざま」は、子どもの生き方の一番の教科書と言えます。（４年生の『２分の１成人式』では、そこに着目してほしいです。）中学校のキャリア教育では、単なる仕事でなく親に焦点を当てます。「親がどんな思いで働き（あるいは働けなくなったか）、子どもにどんな願いを持っているのか。」これを学びます。どの親さんもわが子にさまざまな「思い」を持っておられます。こうして、「親の思い（願い）」が見えた子は、たとえ「荒れ」たとしてもいずれ立ち直ります。（思春期ですから、ちょっとぐらい、あるいは「相当に」ゆれますが、・・。）「たかが仕事、されど仕事」です。もちろん、親さんの仕事を聞いて「そうですか。」で終わってはいけません。もう一歩の「踏み込み」が必要です。自分なりに考えて「でしたら、〇〇なんかもされるんですか？ 大変でしょうね。」などと返します。そうすると、そんな**会話の中に、きっと親さんの願いや苦労、喜びなどが出てきます。これが家庭訪問の大きな収穫＝「宝もの」**です。子どもと話すときの大きな力（「先生とあんたの親とはつながってるねんで。」「あんたの家のこと、先生は知ってるで。」ということもできます。）になります。これは『ベースシート』に書く重要なカギ（子どもをまるごと見る材料）となります。私は先輩から「子どもを口で泣かしたら、一人前の教師や。」って教わりました。「口で泣かす」とは、先生の話で子どもがなくということです。その子の「琴線にふれる」とも言います。子どもが心に引っかかっていることを先生が射止めたとき、子どもは「先生に自分のしんどさをわかってもらえた！」と、それこそスーッと涙を流します。そんな体験、子どもと心で繋がった体験を一度でもすると、教師という仕事はやめられません。『教師冥利』に尽きるのです。（これについては、また機会を改めて。）

　今回、残念ながら「希望制」や学校での「懇談会」に切り替えられた学校は、夏休みなどの機会に家庭訪問を実施されることをお勧めします。そちらの方が時間を気にせずに親さんとお話しできると思います。また、家庭訪問は「子どものために」という意味はもちろんですが、「先生自身の成長のために」という意味もあります。様々な親の「願い」や「生きざま」に触れることができます。
　もう一つあります。それは「学校は先生の土俵」、「家庭は保護者の土俵」ということです。土俵とは、今でいえば「ホームグランド」、サッカーでは「ホーム」と「アウェイ」でしょうか。学校は先生方が考えられている以上に保護者の緊張が違うんですよ。お知りおき願えたらと思います。
　ただ、働き方改革と混同しないでくださいね。何でもこれを出して、学校の取組みを次々とやめていく人がいますから。ほとんどの方はご承知だと思いますが、**働き方改革の中心は、「先生が子どもとしっかりと向き合う」ために行うもの**です。子どもをまるごと捉える家庭訪問はその根幹の一つですから。

　それから、『人は見た目が９割』という言葉もあるように、家庭訪問では、**先生自身の身だしなみにはくれぐれもご注意**ください。第一印象がプラスかマイナスか、問題が起きたときに有利です。
　また、**「特に課題の重い子の家へは、できるだけ早めに行く。」**これが鉄則です。特に中学校の先生は生指がらみでご存じですよね。プラスの出会いの大切さを。学力や行動面に重い課題を持つ子（２年生以上）は、定例の訪問時期を待たずに、一日でも早く行くことをお勧めします。保護者も少しでも早く新しい先生と一緒に何とかしたいと考えておられます。クラスに何人もいるわけではありませんから。「いい出会い」は親御さんとの信頼関係づくりにもなります。（もちろん、定例の訪問はパスできます。）